

戴帽式の現状と将来への展望

仙 田 洋 子

I は じ め に

1965年の春、岡山県立高等看護学校は発展的に解消し、食物科、体育科をもつ岡山県立短期大学に看護科として増設された。増設後まもない看護科としては、いきおい多くの問題にぶつからざるを得なかったのであるが、その一つに戴帽式があった。

すなわち、短期大学においても、「高等看護学校時代と同じようにこの戴帽式を挙行すべきなのか」という問題がそれである。これを検討するために相当な時間と労力を費し、一応の結論に達した⁽¹⁾ことはすでに、水野知文氏によって発表されたとおりである。

そこで筆者は、本学における戴帽式の経過と現状を、また全国 203 の看護婦養成機関を対象としたアンケート調査の結果と若干の論説から、わが国における戴帽式の現状を、いずれも戴帽式の意義に問題の焦点をあてながら論じ、将来への展望を試みる。

II 戴帽式の現況

1. 本学における戴帽式・今日までの経緯

本学看護科が短期大学として発足するにあたり、戴帽式を従来通り挙行するか否かについては、われわれ教員の間でもかなり異った意見が出て、容易にはその結論に達し得なかった。便宜上これを挙行論、不要論に分けて整理すると、次のようであった。

(挙行論とみなされるもの)

① 大学設置者である岡山県としては、より優秀な看護婦を養成する目的で高等看護学校を短期大学としたのである。名称・学制の変化はあっても看護婦養成機関に変わりはないのであるから、当然従来通り挙行すべきである。

② 本学には独自の実習病院がなく、国立病院、赤十字病院で臨床実習を行なっている。そうした事情からも、これらの病院と一緒に学ぶ他校の看護学生と「戴帽式をしない」というような肌の合わないことをやるべきではない。

③ 看護婦養成をしている学校では、ほとんどのところで挙行しているから、看護婦教育を主体としている本学においても行なうべきではないか。

④ 患者に接する前に、看護婦としての自覚を一層深く意識させる機会として必要である。要するに何か精神的なけじめが欲しい。

⑤ 戴帽者は式場の雰囲気から精神的に厳粛なものを受けとるから、区切りをつけるという意味で挙行した方がよい。

⑥ 自分の戴帽の経験からいって、生涯忘れられないほどの感激をうけたし、キャップは“dignity”として教えられ、それを戴くことに誇りを覚えたものだ。看護学生である後輩にもぜひこのような経験をさせたい。

⑦ 本学看護科の前身である高等看護学校時代も従来通りの戴帽式を行なってきたが、別に害になったとは思わない。今回から取り止める積極的な理由がない。

⑧ 本学においては、まだ看護婦の養成機関としての内容が充実していない現状だから、せ

めて戴帽式のような行事は従来どおり行なった方がよいだろう。

⑨ いままでのようなありきたりのやり方でなく、短大看護科としてもっと独創的なものにして行なえばよい。

⑩ 卒業生が誇りと愛着を持てるような、本学看護科独自の帽子やバッジをつくろうではないか。

⑪ 行事を行なうについては、学生に納得させる方がよい。学生に相談をもちかけ主旨を徹底して行なえばよい。

⑫ 大学側、教員側からというように、上から与えるだけでは学生の反撥を買うことになる。学生に自主性をもたせ、研究させて、学生自らの手で解決させてはどうか。

(不要論とみなされるもの)

① 戴帽式は得度式の際の「頭を低くする」という意味に通じ、封建性の名残りがあるので、その方法については問題がある。

② 本学は宗教的教育機関でもないし、また多くの高等看護学校にみられる予科期間というべきものをも持たない。また、看護学生としての資質云々は別の方法で考慮されるべきもので、戴帽式を行なう意味はあまり認められない。

③ 「患者に接する前の看護婦としての自覚」という点については、各教科を通じて充分解決し得るはずのものである。もし教科を通じて解決できないとすれば、それらの内容にこそ問題があろう。

④ 方法論に違いこそあれ、真理の探究としての学問にとって大切なことは、結局のところ「科学する態度」であろう。とすれば、一日も早く学生にこの科学的思考態度を修得させるべく努力することが、現在の看護教育に従事する者に課せられた責務というべきではなからうか。少なくとも、学生が卒業する時点ではそうした態度が身につけていなければならない。そしてまた、そうすることが真に「患者のための看護」を可能にするものでもある。従って、これらのことを実践していくためには、看護教育に直接関係するとは思われない「ことから」は簡素化、または廃止していかねばならない。

以上のような意見に要約され、戴帽式は行なうこととなった。学生にこれを周知させる機会をもち、その際の学生たちの質問は次のようであった。すなわち、「戴帽式などを行ない、帽子だけをなぜ特別に扱うのか。ユニホームの一部と考えれば白衣と同じように自分で勝手に着るわけにはいかないものか」「職業的な威厳を帽子に持たせるのなら、学生の身分では業務上の責任は取れないから帽子をつけて行動することはできないと思う」「帽子をつけなければ病院実習にでられないものか。清潔に保つためならば三角布を被ってもよいのではないか」「生命を対象とする職業は他にも多くある。なぜ看護教育に限って＜儀式＞をせねばならないのか解らない」「養護教員を志望して入学した者にとって、臨床看護婦像としての帽子を戴することは進路を制限されるような気がする」などである。

表1 岡山県立短期大学看護科における戴帽式の意義づけ

- | |
|--|
| <p>(1) 臨床実習を開始するに際し、学生個々の反省と将来への責任を充分に自覚する機会とする。</p> <p>(2) 臨床実習への精神的オリエンテーションと共に、実習方法、病院内での人間関係、その他実習場のもつ背景や条件などについてのオリエンテーションをする。</p> <p>(3) 学生、父兄、教員が、(1)(2)を通じて深く看護に思いをいたし、一つのものを見つめ合う機会とする。</p> |
|--|

一方、看護科教員は「本学における戴帽式の意義づけ」について表Ⅰのような統一見解をま

とめた。

こうして第一回の戴帽式を挙行了したのち、学生からは次のような感想を得た。

- ① 戴帽式を機会に臨床看護に興味をもつようになった。
- ② シンポジウムを計画したことは良かった。
- ③ 戴帽式の由来、意義を十分に理解しないまま戴帽式を行なったことは残念であった。
- ④ 式の方法、進め方に注文したい。もっと学生の意見も聞いて決めて欲しかった。
- ⑤ もっと早くから「戴帽式」というテーマを与えられて、学生自らが考えて自主的にやっていたかった。
- ⑥ 非常に厳粛なものだと思っていたが、あっけなく済んで物足りなかった。
- ⑦ 看護学＝看護婦学とは考えていない。
- ⑧ 戴帽式は進路を束縛する。帽子を受ける者は看護婦にならねばならないように思えて縛られる感じがした。
- ⑨ 帽子をつけるという形式から、自分の心の自由を奪われるような不安をもった。個性さえも失ってしまいそうに思えた。
- ⑩ 要するに自分自身が自覚しさえすればよいことで、式は行なわなくてよい。

次いで第二回の戴帽式を計画するにあたり、看護科教員の中から再び要・不要論がでたので、その大要について触れておきたい。

(必要論)

看護教育の課程において戴帽式は当然行なうべきものだと思っていた。戴帽式を行なうことに疑問をもつことすら不思議に思われる。体験からいって学生にもぜひやらせたい。

(不要論)

① 本学における第一回戴帽式の意義づけは、要するに看護職＝臨床看護婦への入門の儀式であるということになる。しかし、今日の動向として看護教育は養成所から大学教育に移りつつある。それは、いまや看護が従来のような狭い意味での臨床看護から、健康人をも含めた人類の保健を目標として、その対象を全人間的にとらえ、身体的・心理的・社会的に援助する活動へと、その範囲を拡大しているからである。その活動の支えとなる基礎的、実践的知識は科学(学問)として自他ともに認識されうるものでなければならない。

一方、学生の側から言っても大学は教養と専門的知識の修得の場であり、それによって職業的義務を負わされるものではない。彼女らは看護教育を受けたのち、広義の看護のどの分野へも進む可能性を有しており、その選択は自由であるべきだと思う。従って「白衣への誓い」は

表2 戴帽式(式典のみ)の推移

施行 内容	第一回 41年2月22日	第二回 42年2月14日	第三回 43年2月20日	第四回 44年5月23日
誓いの言葉	戴帽生全員冥想	クラスの代表が朗読(自作)	クラス代表の朗読(自作)	クラス代表朗読(自作)
戴帽の方法	看護科教員(学長)より	上級生より下級生へ(学長)	上級生より下級生へ(学長)	学長が戴帽生各個に渡し自分で戴帽
雰囲気 (使用したもの)	暗転使用、キャンドルサービス バックグランドミュージック使用	明所、キャンドルサービス バックグランドミュージック使用	明所	明所、大鏡使用 バックグランドミュージック使用

無意味である、

② 養成から教育へ、技能から科学へ、狭義の看護から広義の看護へと脱皮しようとしている筈なのに、旧い立場からの経験的必要論は時代錯誤であり、逆に看護の進歩発展をはばむことになる。

③ いまなお看護は学問として確立されていないことを深く認識し、そこから地道に一歩一歩築きあげていくべきである。ムーディな儀式にうっとり酔っている時ではない。

しかし、第一回戴帽式における「意義づけ」を変えることなく、第四回目の今日まで表2に示すように実施してきた。

2. 本学における戴帽式の現状

1969年5月23日に行なった第四回戴帽式は「戴帽」と「単位の履修」との関係を一応明確にしたこと、企画の段階から学生を参加させたこともあって、従来のそれとはやや趣を異にしている(表3)。即ち、

表3 本学における戴帽式の現状

(昭和44年5月23日)

式典	式典	誓いの言葉：クラス代表(自作) 戴帽：学長より戴帽生個人へ(明所、教員の介添) キャンドルサービスなし 鏡：使用 バックグラウンドミュージック、あり
		シンポジウム： 「先輩に聴く」 講師：三原千賀子(国立岡山病院、看護婦) 菊川 和子(津山保健所、保健婦) 柴田三喜子(国立岡山病院、助産婦) 林 怜子(順正短期大学、助手) 佐々木澄江(玉島西中学校、養護教員) 助言者：久留島京子(本学助教授) 司 会：合田富美子(本学講師)
		映画 「私は看護婦」 岡山県支部(日本看護協会)提供
		祝賀会 主催：看護科自治会 (看護科全学生) (看護科教員)

註：式典記念行事の区分(巾)は時間関係を示す。

① 「看護帽(キャップ)」についての再確認(表4)をしたこと。

② 「臨床看護実習を履修するためには、基礎的なものとして<看護技術および看護技術実習>の単位を修得していること」という最低の条件がつけられた。すなわち、病院における実

表4 「キャップ」の意味するもの

(1) 看護婦の制服（象徴）となっている。
(2) キャップの効用。 現在ではほとんど意味をもたない。然し歴史的変遷の中では実務的に意味があつて現在でも、それが考えられないことはない。
(3) 従つて病院で実習する看護学生にもキャップの着用の要を生じる。

習を履修しうるかどうかが、その可能性を知るために便宜上、一応の基本線を引いたわけである。

③ 戴帽式の計画は、看護科教員代表4名と学生代表8名によって具体的に進められ、学生が「学生自らの戴帽式である」という認識を持って行なわれた。

この戴帽式で学生は自分の姿を鏡に写しながら、自らの手で帽子をつけるなど「戴帽」に変化があつたこと。また記念行事を行ない、これに参加することによって学生個々が自ら学んできた過去をふり返り、更に将来への自覚と責任について認識を新たにするための素材とするためにシンポジウムや映画会を取り入れたこと、などその実を挙げるような工夫がみられた。特にシンポジウムでは「先輩に聴く」をテーマに、各界で活躍しつつある本学の卒業生を演者として招き、先輩という親近感も手伝つて、活発な討論が展開された。さらに、祝賀会は看護科学生自治会の主催で、全学生が参加して行なわれ、看護科教員も加わり、参加者全員が和気あいあいのうちに戴帽生に祝福を送り、未来への躍進を望んだ。

Ⅲ わが国における戴帽式の現状

わが国における戴帽式の歴史についてはすでにふれている⁽¹¹⁾ので、ここではその現状について述べたい。

筆者は1967年12月、全国203校を対象として「アンケート」調査を行ない、「戴帽式の現状」について表5の結果を得た。調査の方法はアンケート用紙を総数203校（1966年12月厚生省調べ）に配布し、その87%にあたる180校から回答を得た。

また、アンケートの自由記載欄から、戴帽式の意義に関連したものだけを拾ってみると次のとおりである（記入したもの46校）

表5-1 実 施 状 況 (180校)

	し た	しなかった	わからない	記入なし
本年度実施した	177	3 (該当学生なし1 新設校 1 四年制大学 1)	0	0
過去に実施してきた	連続してきた 167	しなかった 1 (新設校)	わからない 0	記入なし 0
次の年も実施の予定あり	あ り 166	な し 1	わからない 3	記入なし 10

表5-2 実施の時期 (178校)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
学校数	0	2	0	1	0	0	0	0	10	135	30	6

表5-3 実施方法など (178校)

	し た		し な い		無 記 入	
キャンドル・サービス	165校	92%	7校	4%	6校	3%
バックグラウンド・ミュージック	140%	78%	19%	11%	19%	11%
式場暗転	155%	86%	11%	6%	12%	7%
ナイチンゲール誓詞朗読	167%	93%	6%	3%	5%	3%
学生・生徒宣誓	110%	61%	40%	22%	28%	16%

① 学生に看護婦としての使命を自覚させる一つの時期としているため、戴帽のまえ3日間は自己の人間形成の一環として修養会にあてている。ナイチンゲール誓詞の代りに「カトリック看護婦の祈り」を唱えることもある。

② 戴帽生が感激して「看護婦になるのだという自覚を新たにし学業に励む」ということで、この行事の意義を認めている。

③ 看護学生の自覚をたかめるための一つの区切りとして絶対に継続させたい。また父兄が全員集まり学院の理解を深めるなどの利点がある。

④ 学校ごとに形式は異なっても、帽子を戴くことの意義をもっとはっきりさせるように考えて行ないたい。

⑤ 看護学生として、学生時代から職業観念を身につける意味で実施した方がよい。

⑥ 戴帽式について考えなおす必要があると思う。予科期間6カ月ということに問題があると思うので今後検討したい。

⑦ 創立20周年を迎えた現在、戴帽式の意義を改めて考え、検討する必要を痛感している。

⑧ 戴帽式について納得がいかないところがあるのでやめたいと思うが、学生側の要望で毎年行なっている。

⑨ 戴帽式は従来から行なってきたが、形式にとらわれる必要はなく、将来は式そのものを行なう必要はないように思う。

こうして、ようやく⑥⑦⑧⑨のような反省が出はじめてはいるものの、ほとんどの養成機関において戴帽式を実施しているのが現状であり、その時期や方法においても1949年、GHQ看護系の指導下で行なわれたものが伝統的に引継がれ、そのまま定着していることがうかがわれる。

一方、筆者が1966年6月、American Nurse Assosiation へ戴帽式について照会したときの回答によれば、「戴帽式は学校によって異っている といってよい。そもそも、その始まりは、学生が完全に看護学生として受け入れられる象徴として、看護教育に一つの区切りとして計画されたものであった。もはやこの儀式を行っていない学校 もいくつかある。従って現在では、教育的に効果があるような諸基準が学校でととのえられ、その線にそって学生を訓育し、卒業せしめることに重点がおかれていると考えてよい。」ということである。

Ⅳ 考 察

本学における戴帽式については、その挙行に是非両論があって「経緯と現状」に詳述した通りであるが、1969年5月に行なわれた第四回戴帽式(表3)は「戴帽の意義」を充分に考慮し、現在の看護教育の実状を把握した結果に基づくものである。

戴帽式については筆者のみならず諸兄姉がすでに数多くの意見を述べている。大嶽康子女史⁽¹⁾は、ナイチンゲールの業績を偲び、看護婦としての職業的倫理観を再認識させることに、戴帽式の意義を見出しているし、田中悦女史⁽¹⁸⁾は、看護婦という職業の特異性を強調して、この道に学ぶ者の自覚と反省から自己の適性を確める機会として、戴帽式を意義づけている。また、仲田妙子女史⁽¹⁶⁾は、「冠」についての意義を説き、これを戴く適性の有無を見出す予科期間の終了として戴帽式を論じている。

こうした論旨については「看護の本質」にふれるいくつかの問題点が浮かばざるを得ない。いま、これを便宜上次の4点に整理して考察をすすめてみる。

① 看護職の適性について

適性について、普通一般に経験している事実は、従来「尊い生命に関与する」という聖職にある看護婦がもっていなければならないとされてきた自負は、次第にその根拠を失いつつあるということである。そして、すでに1958年ILOの看護専門家委員会も、「看護が労働上、他の職業と何ら特別な違いを持たないと結論づけている」ようである⁽²⁰⁾。したがって、これまで伝統的に看護職の適性と考えられてきたものの多くは、芝田不二男氏の述べている如く、むしろ「科学的な看護の追求によって、誰れにでも伝達できる客観的な知識や技術に高めなければならない⁽⁹⁾」のかも知れない。

また、看護職への適性の存在を前提にしても、看護職への適性を「積極的にさし示してくれる手段をもたない今日」「結論的に行きつくところは基礎的な一般教育を充実させることが高い職業適性を培う王道である⁽²¹⁾」ということになるであろう。こうしていまや看護教育は、職業資質を高めるために一般教養を充実させ、科学的な看護教育体系によって、真の専門職業人の養成の場にまで高められなければならないのである。

さて、田中・仲田両女史の適性論についてであるが、これまで考察してきたところから、まずその考えかたにかなりの疑問を生ずるのである。常に問題意識をもち、物事に批判的に取り組む主体的、自律的な態度を養うことこそ、真の看護を遂行するに不可欠な要件ではなかろうか。

さらに、看護を究める以前から看護婦としての適性を固定的に判定することは、「個体と環境との関係が、ダイナミックなものである⁽²²⁾」ことを思うとき、考え直さざるを得なくなる。また、人間は成長する存在であり、常に変化する存在である。学生の持つ可能性を引き出し、その資質能力を伸ばすことこそ、看護教育にたづさわる者が、常に心しなければならないことである。これに対して、人間的に「期待不可能」と思われるような判定基準によって、その適性を固定的に判断するのであれば、主体的な看護婦を養成することはできないであろう。

こうした観点から現状を考えると、戴帽式を看護職へのパスポートの一つとするには、あまりにも看護職の職業適性に関する科学的裏付けが貧弱であると筆者は思わざるを得ない。従って、戴帽式にいわゆる適性を判断するという意味を持たせることには、かなりの無理が生じると思う。

② ナイチンゲール精神について

大嶽女史は、「ナイチンゲールの生涯を、生きた教訓として学べ⁽²⁾」と強調しているが、看

護婦としての主体的、自律的態度に関する限り筆者もこれに同感である。しかし同時にナイチンゲールの思想と行動には、自ずから一定の限界があることに注意を怠ってはならないであろう。特に明治以来のわが国における伝統的なナイチンゲール精神については、いささか疑問を抱くものである。というのは、明治政府の欧化主義によって輸入された西欧の看護精神が、絶対服従を美德とする儒教思想によって変質され、日本的に歪曲形成されたものである⁽¹⁵⁾ことを肯定せざるを得ないからである。ナイチンゲールの看護事業が従軍によって確立したことや、クリミア戦争での献身的な活動をたたえて生まれた「クリミアの天使」ということばなどは、軍国主義によって巧みに利用されつづけたのであった⁽¹²⁾。こうした日本のナイチンゲール精神は、看護婦のものの見方、考え方を支配してきた。そして民主化された現在でも独立した職業人としての看護婦の地位は、理念の域を脱しきれないでいる。戴帽式が、もしこのように誤ったナイチンゲール精神を受け継ぐためのものであるとしたならば、それは科学的看護学の探究に渋滞、または制止の一因をなすおそれがあるように思う。

③ 看護婦の職業意識について

人間の生命は尊い。直接その尊い生命を托されている職業につく看護婦は、それにふさわしい人間でなければならない。そして常に誠実を旨として職務に精励し、期待された重い責任を果たすために努力を惜しんではならない。しかし、これらがもし尊い職業であるが故に、その責任は重く、自己犠牲を伴うきびしい勤務にも当然耐えて行かねばならないとする「精神主義と現実肯定主義の無批判なゆ着⁽⁸⁾」から生じたとするならば、これを許容するわけにはゆかない。アンケート自由記載欄⑤や仲田女史⁽¹⁷⁾の「単に報酬をもらうため、というほどの職業意識では良い看護ができない」ほど「看護職」への座は「きびしく、また責任の重いもの」という意見や、田中女史⁽¹⁴⁾の学生が基礎教育の準備期間中に真剣に考えるべきであるとしている論旨なども、それが主体性をもった看護婦によって「具体的現実とのかかわりあいの中で、批判的に問題とされるときはじめて意味がある⁽⁷⁾」ものとなるのである。これに反して、それが固定した精神態度として説かれる時には、常にその程度をあいまいにしたまま、その正当性のみを保有しようとする徳目主義に陥る危険を伴っていることに注意せねばならない。

幸か不幸か、考察②で述べたような日本のナイチンゲール精神でもって、黙々と働いてさえおれば世の中の人々に尊敬の念が生まれ、社会的地位は自ずから高くなり、労働条件は改善され、賃金は労働にみあったものになるという神話を信じる者は少なくなった。菅谷章氏⁽¹⁰⁾も「戦後の新しい教育を受けてきた女性の大半は、いまや看護婦の職業を特別なものとは見ておらず、他の職業と同様、生活の糧として賃金を得るための就業の場としか見ていない」とのべていることにも一理がある。

④ 看護の本質について

本学における挙行論④⑤⑥、戴帽後の学生の感想①②、アンケート自由記載欄①②③および大嶽・田中・仲田女史など戴帽式に意義を認めているもののほとんどは看護倫理を習得し、臨床看護婦としての自覚を深める機会としてこれをとらえているが、戴帽式にそれ程大きな意義を荷なわせることに疑問を持たざるを得ない。すなわち、看護教育が従来通りに行なわれ続け、看護のもつ意味も従来のままであれば筆者も肯定するものである。しかし看護教育⁽³⁾についても、看護のもつ意味についても考慮されつつある現在においては、そのままこれらの論旨を肯定するわけにはいかないのである。

ヘンダーソンの看護の定義を把えて笹原邦彦氏は「患者とのわれーなんじの出会いにおいて改めて医療を考え、心理学、医学、社会学などの知識も動員し、医師や同僚看護婦との関係も

配慮し、看護婦に対する一般社会の期待、自分自身の労働者としての権利、個人の能力や好みまで考慮して、その時点における看護を自らの責任において決定する⁴⁾という、きわめて主体的、自律的なものでなくてはならないと理解しているようである。芝田氏もまた、看護とは患者の利益から出発し、その他数多くの条件も合わせ考えながら、自らの責任において決断するという、まさに「一回的、特殊的、具体的事態としての、人間患者と人間看護婦との相互作用⁵⁾」として、これら両者の間に「直接的、継続的人間関係を結んで展開する人間回復への主体的ないとなみである⁵⁾」と定義している。

筆者も看護の本質をこのように考え、主体的な看護業務を遂行しようとするれば、どうしても学問としての看護を追求し、これを確立せねばならないことになるのである。結局、本学における不要論に数点指摘されているように、戴帽式を看護教育における三大儀式の一つとして位置づけることよりも、「医学の追求が医師の養成につながると同じく、看護学を追求することが、真の専門職としての看護婦養成になる⁶⁾」ためには、その過程の中に、科学的・合理的な人間形成を期待すべきであろう。

V お わ り に

1949年、日本ではじめての戴帽生となった経験者のひとは、戴帽式について次のように述懐している。「戴帽式では生涯忘れられない感激をうけた。もっともそれは終戦後の世情が殺伐としていて、情緒的なものを満足させるような、うるおいが何一つなかったということ、卒業したら看護婦になるのだと単純に考えていたことなどに起因しているのかも知れない」と。

こうして、太平洋戦争終結後GHQ看護係の指導下で、わが国看護教育の中に根をおろし、その過程における三大儀式の一つとして行なわれてきた戴帽式も、上述したようにその意義に焦点をあててこれをみなおしたとき、そこにひそんでいる問題は実に看護学の本質論・方法論にまで発展しなければ解決されない内容をはらんでいることに気付き、考察を試みたが、戴帽式の将来を論ずることはそのまま看護学の将来を論ずることではなければならないことになり、三木福治郎氏¹⁸⁾の言う「看護教育の夜明けに、戴帽の儀が教科目の履修方法の相違によって大きく揺れ動くであろう」に帰着せざるを得ない。

筆者は、本学の戴帽式の現状に決して満足するものではないが、現況から推して現在ありうる戴帽式として、より望ましい姿であらうことを述べて諸兄姉の御批判を望みます。

稿を終るにあたりまして、終始ご指導ご校閲下さいました本学看護科主任教授三木福治郎博士、並びに合田富美子講師に深甚の謝意を表します。またアンケート調査など、数多くのご教示とご便宜をお与え下さいました各位に厚くお礼申しあげます。

参 考 文 献

- 1) 大嶽康子：看護は実践の学，看護教育，6巻，10号．3～4頁，1965.
- 2) 同上，3頁.
- 3) 勝沼晴雄・金子光：新カリキュラムの基本方向について，看護教育，8巻，1号．22～36頁，1967.
- 4) 笹原邦彦：看護の本質，看護技術，6巻，10号．98頁，1970.
- 5) 芝田不二男：看護倫理への提案，看護教育，7巻，8号．64頁，1966.
- 6) 同上，63～64頁
- 7) 同上，63頁
- 8) 芝田不二男：橋本「看護倫理」批判，高知女子大学紀要，第16巻，18頁，昭和43年.

- 9) 同上, 20頁
- 10) 菅谷章: 看護労働の諸問題, 3頁, 1965. 医学書院.
- 11) 仙田洋子: 看護における戴帽の変遷とその背景, 看護教育, 8巻, 9号. 69~75頁. 1967.
- 12) 同上, 74頁
- 13) 田中悦: 強い信念をもって: 看護教育, 6巻, 10号. 4~5頁, 1965.
- 14) 同上, 5頁
- 15) 田中繁子: 日本におけるナイチンゲール精神の歴史的原点について: 看護技術, 通巻189号, 61頁, 1969.
- 16) 仲田妙子: 戴帽式を迎えるあなたに: 看護学習1年, 10巻, 7号. 10~15頁, 1966.
- 17) 同上, 13頁
- 18) 三木福治郎: 戴帽式の意味: 看護教育, 8巻, 8号. 32頁, 1967.
- 19) 水野知文: 看護学生の意識について, 看護教育, 9巻, 8号. 49頁, 1968.
- 20) 湯頁ます: 看護教育と適性, 看護教育, 6巻, 3号. 6頁, 1965.
- 21) 同上, 9~10頁
- 22) 同上, 3頁

昭和45年3月30日出稿